



駐日大使は語る ⑩

駐日スウェーデン王国大使 ペールエリック・ヘーグベリ

駐日大使は、各国の正式代表として

日本に常駐する唯一の存在。

大使の目に、日本外交はどう映るのか。

好奇心こそが自身の原動力と語る

ヘーグベリ大使に對日関係への期待を聞いた。

Pereric Högberg

1967年生まれ。在南アフリカ大使館一等書記官、スウェーデン芸術評議会国際部課長、外務省アフリカ局局长、駐ベトナム大使などを歴任し、2019年9月より現職。

外交とは「人と人」が紡ぐもの 活力あふれる日・スウェーデン関係

【インタビュ・構成】小南有紀

——大使のインスタグラムには日本各地の写真が投稿されていますね。

大使 駐日大使になってから、日本各地を旅しました。どこも思い出の場所ですが、私はスウェーデン北部の出身なので、北日本には特に親近感をおぼえます。ニセコ、富良野、留寿都など、北海道にはよくスキーに行っています。最近訪問した秋田県もすばらしい場所で、乳頭温泉郷は最高でした。スウェーデン人はサウナが大好きなのですが、温泉

にはまた一味違った魅力がありますね。

私は常々、日本の皆さんの「身近な大使」でありたいと思っています。特に、学校や大学を訪問して、学生さんたちとお話する機会を大切にしています。彼ら、彼女らの意見や質問は、いつも私に新たな気づきを与えてくれるのです。駐日大使は意外と身近な存在ですよ。

——どのようなきっかけで外交官を志したのですか。

大使 私のキャリアは「偶然」の連続です。実は私のもと

もと研究者を目指しており、修士課程では南アフリカを事例に野党の役割について研究していました。しかしある日、指導教授から「君には公務員や外交官の方が向いているのではないか」と言われたのです。たしかに、それこそが自分の興味関心に適うものでした。そこで、まずスウェーデン国際開発協力庁で一年半働き、一九九五年に外務省に入省したのです。その後は主にアフリカ関連の仕事に携わり、ナミビアと南アフリカでの駐在、アフリカ局長などを経験しました。そして、二〇一六年からはベトナムに大使として赴任しました。

私はとても好奇心旺盛な人間なので、世界中のいろいろな場所に行つて人々と出会い、現地の文化に触れることにこの上ない喜びを感じます。私にとって、外交官という仕事は天職ですね。

——一九年の駐日大使就任時はいかがでしたか。

大使 それはもう、わくわくしましたよ！ 日本には観光で訪れたことがあり、すばらしい国だという印象を持っていました。ただ、日本の専門家ではない私が駐日大使に選ばれたことは少し意外でした。すると当時の副大臣から、「君のこれまでの仕事ぶりを見て、駐日大使にふさわしいと考えたんだ。これまで通りのやり方で、日本との関係発

展に力を尽くしてほしい」と言われたのです。この言葉に背中を押され、家族とともに日本に赴任しました。駐日大使として、本当に充実した日々を送っていますよ。

社会における女性の活躍と移民・難民

——スウェーデンでは閣僚の約半数を女性が占めるなど、女性の活躍が著しいですね。

大使 かつてのスウェーデンは人口減少による労働力不足に悩んでいました。女性の社会進出は、女性の権利向上という点だけでなく、労働力不足への対応という点でも重要でした。社会の力をフルに活用するには、女性の活躍が不可欠です。男女平等は実利も大きいのです。

スウェーデンでは子育て支援が充実しています。例えば、自治体には保育所を設置する義務が法的に課せられています。男性の育休取得率も約九割に上り、私自身も育休を二度取得しています。男性が育児に協力的なのも、女性の社会進出を促進している要因だといえるでしょう。

——移民についてはいかがでしょう。

大使 移民も労働力不足への処方箋になり得ます。スウェーデンは「移民国家」であり、特に第二次世界大戦後は積極的に移民を受け入れてきました。移民はスウェーデ

ン社会の原動力となっています。また、我が国は人道的な立場から、積極的に難民を受け入れてきました。現在では、我が国の人口の約二〇%（約二〇〇万人）が外国生まれです。

一方、スウェーデンは決して「パラダイス」ではなく、さまざまな問題もあることを認めなければなりません。例えば、二〇一五年のいわゆる「欧州難民危機」では、突如として二五十万人以上の難民がスウェーデンに押し寄せました。移民・難民の社会への統合は完璧というわけではなく、言語教育や保育所・学校の設置などが追いついていないというのも事実です。しかし、スウェーデンでは全ての政党が、問題が存在することを認めた上で、解決のために真摯に話し合っています。最近、「反イスラーム」感情がスウェーデン社会に広がっているという報道を目にしますが、それはごく一部の人々の言動を誇張したイメージだと言わざるを得ません。大多数のスウェーデン人が民主主義の理念に則って、建設的な議論をしていることは強調しておきたいと思います。

深まる日・スウェーデンの安全保障協力

——ロシアによるウクライナ侵略を機に、スウェーデン

は北大西洋条約機構（NATO）加盟を目指しています。**大使** スウェーデンは長年にわたって隣国であるロシアとの対話に努めてきました。ナポレオン戦争が終結した一八一四年以来、スウェーデンは一度も他国と戦火を交えたことはありません。率直に言って、私自身を含む多くのスウェーデン人が、ロシアがウクライナを実際に侵略するとは思っていませんでした。今から思えば、樂觀的すぎたのかもしれない。

二〇二二年二月二四日のロシアによる侵略は、スウェーデンの安全保障認識を一変させました。軍事非同盟というそれまでの原則を転換し、NATO加盟を目指すことにしたので。我が国の防衛力強化は、NATOや欧州全体の安全保障にも資することです。我が国は、民主主義や自由といった価値、そしてリベラルな国際秩序を守るために立ち上がったのです。NATO加盟が早期に実現することを期待しています。

——日本を取り巻く安全保障環境も厳しさを増しています。

大使 欧州とインド太平洋は連結しており、欧日の連携が不可欠です。スウェーデンは同志国である日本との協力緊密化を希望しており、スウェーデンとフィンランドのNA



2023年7月12日、NATO首脳会合出席のためリトアニアのビリニユスを訪問した岸田文雄首相とスウェーデンのウルフ・クリステション首相との会談が行われた

TO加盟に対する日本の支持に深く感謝しています。また、我が国は北朝鮮に大使館を置いており、朝鮮半島情勢にも大きな関心を持っています。私自身は、駐ベトナム大使時代に、中国による南シナ海での活動によって地域の緊張が高まる様子を目の当たりにしました。

日・スウェーデン間の安全保障協力が、欧州とインド太平洋における平和と安定に寄与することは間違いあり

ません。我が国は世界有数の防衛技術を有しており、二二年一二月には「日・スウェーデン防衛装備品・技術移転協定」が署名されました。今後も両国間の安全保障協力は深化していくでしょう。

——日・スウェーデン関係のさらなる発展に向けて、何を期待されますか。

大使 私は常々、スウェーデンの政治家や経営者たちに、日本のカウンターパートと電話やメールで気軽に連絡を取り合えるような関係を築くことを勧めています。公的な会議だけでなく、普段からの意思疎通が、ここぞという時に役に立つのです。

両国の学術交流も活発で、例えば大学間連携ネットワーク「MIRA I2.0」には両国から一〇大学ずつ（計二〇大学）が参加しています。また、スウェーデン人のカリン・マルキデス博士が学長兼理事を務める沖縄科学技術大学院大学は、先端的な科学研究の一大拠点となっています。

外交とは政治家や外交官だけのものではなく、読者の皆さんも含む「人と人」が紡ぐものです。私自身にも、「生涯の友」と呼べるような日本の友人がたくさんいます。国民同士の絆に裏打ちされた、日・スウェーデン関係の明るい未来が楽しみですね。●